

日本語教育実習 最終レポート

三年間、日本語教育について勉強し、沢山のことを考え、知識を身につけた。その中でも正直難しいと思ったこともあれば、悩んだこともあった。それらの全てをこれから記す。

私が日本語教員養成課程に興味を持ったのは、高校時代に訪れたオープンキャンパス（531教室）のフリートークの時である。先輩が楽しそうに話す姿を見て、外国人に日本語を教えることに興味を持ったあの気持ちを今でも覚えている。「楽しそう」ということ思いで飛び込んだ日本語教育だった。日本語を教えることは難しいけど、同時に楽しさがあった。このレポートでは、「伝えるということ」と「日本語教育の現状」について詳しく述べる。

まだ、日本語教育について未熟だった私は、三年間で日本語教育の知識と技術を習得し、外国人留学生に教えることができるかどうか正直不安だった。平仮名、カタカナの書き順や語句の意味の違いを伝えることは難しかった。日本語学概論は特に難しかったが、正しい発音や日本語の意味を考える知識を得ることができた。基礎を学ぶ段階では、DVD学習、本を読んでグループでワークすることが多く、私にとっては全て、ためになった。私が一番印象に残っているDVDはT先生の授業である。T先生の授業は「生徒に伝わる授業」であると思う。生徒とのコミュニケーションが授業の中で多く取り入れられていて、そのことは自学ノートの添削やコメントからも理解できた。

教材発表をした際、アドバイスで情報が多すぎて絵カードからはあまり伝わらないと、先輩から言われた。外国人学習者に伝わるには少ない情報かつ簡単な日本語で伝えることが大切だと分かった瞬間でもあった。実際に三年生になって前期と後期に実習授業を行ったが、学習者のレベルに合わせた授業を私たちは提供しなければならないので、伝わるように毎回努力した。前回の改善点を次の授業で生かすことを目標とした。「伝わる授業」を作るには、学習者の目をしっかり見ること、簡単で分かりやすい日本語を使って授業をすること、学習者よりも大きな声を出すこと、立ち位置などへの気配りが必要。私が一年生の時は、だれでも簡単に日本語を教えられるのではないかと思っていた。しかし、実習授業を通して、これらはとても難しく訓練が必要なことだと分かった。

実習生を相手に指名の練習をしたとき、緊張してあまり目を見ることができなかった。YMCAでの最後の実習授業では絵カードを使いながら指名をすることになったのだが、授業をしながら、過去に実習生の前でフラッシュカードをした経験が脳裏に浮かんで、「過去にも同じことをしたから出来る」と自分に言い聞かせながら取り組んだ。その結果、私は学習者の目をしっかり見て指名することが出来た。学習者と目を合わせるのに抵抗がなくなり、むしろコミュニケーションをとることが楽しいと思えるようになっていた。YMCAの留学生とのディスカッションの時間で、学習者が一生懸命になって自分が知っている日本語を使って話そうとしている姿に、しっかり答えてあげたいという教師の視線で

対応している自分がいたのだ。内面部分でも三年間で教師に近い思いを持つことが出来ていた。

異文化間コミュニケーションの授業で、「伝える方法はたくさんある」ことを習った。表情豊かな発言、優しい日本語を使うことも勿論大切だが、相手のことを考えることが一番大切だと思った。授業の中で、ペアと向かい合わせになって相手のことだけを集中して考える時間があつた。相手のことだけを考えるというのは難しく、どこかのタイミングで違うことを考えてしまいがちである。自分のことを話すときは伝えようとして相手を見て話す、話を聞く側になると聞いてはいるものの、普段違うことも考えているのではないかと思った瞬間だった。伝え合うためには、相手の理解だけでなく自分自身の聞く姿勢も本当に大事である。

次に日本語教育について、私が考えていることを述べる。私は日本語教育に興味を持つ前から、海外の人にどうすれば分かりやすい日本語で教えることが出来るかということを考えてようになった。現在、日本語教員は日本に留学してきた外国人や移住した外国人に比べて少ない傾向にある。その為、ボランティアや特別に配置された教員が協力して教えているのである。私はこの事実を知って、日本語教育に将来携わりたいと思うようになった。「日本語教師は毎日、新しい発見があつて面白い」とおっしゃっていた横溝先生の言葉が私にはとても印象的に残っている。私はこのことを三年間通して実感したと思うし、さらに三年時の実習期間を通してやりがいのある職業だと特に思うようになった。日本語教員に携わる先生方を授業中のDVDや、実際に学校訪問をして思ったことだが、共通していることは教師も学生も笑顔で楽しくコミュニケーションをとっていたことだ。世界の共通言語は「英語」だが、「日本語」を世界の人々に対して広めることが平和につながるのではないかと私はそう思う。彼らの人生に影響するかもしれないし、日本語が出来れば、日本での生活に困らない。前期の実習授業のロールプレイは、実際に日本で生活していて起こり得るシチュエーションで行った。学習者にとって好評だった。美容室でのロールプレイを行ったのだが、予想しなかった質問を受けたり、学生が役に入り込んだりして、驚きと焦りの連続だった。私はうまく質問に答えることが出来なかった。何を聞かれるかを事前に予想して、授業の準備に取りかからなければならないことを学んだ。状況に応じた対応も大切だと分かった。例えば、用意していた答えとは違う答えが出たとき、内容が似ていたら「それもいいね」と評価をすることで、学習者のモチベーションアップにつながるだろう。答えとずれていたら、正解を他の学習者と一緒に考える。私が将来日本語を教えることがあつたら、そうやってみんなで作っていく授業をしたい。周りがこの授業に参加したいと思える授業を提供することで、日本語を学ぶことは楽しいと思ってもらおう。それが私の目標だ。

最後に、外国人が日本語を学べば、同時に日本文化や習慣も学ぶことが出来るに違いない。同じグループだった実習生の一人が、学習者の母国の文字や文化に触れながら、とても活気ある授業を行っていた。私も学習者の母国に触れた授業をしたが、日本に重点を置

いた授業が多かった。学習者に伝わったかどうかは分からないが、一人一人が注目して授業を聞いてくれたので嬉しかった。

母語である日本語についてこんなにも考えたことは、日本語教育養成課程を取る前はなかった。英語よりは簡単だと思っていたけど、学んでみると奥が深い。語句の意味の違い、書き順にも意味があって、学ぶべきことは沢山あるし、これからも学ばなければならないと思っている。社会人になって正しい日本語を使えるようになるのが今の課題だ。アルバイト敬語は卒業して、きれいな日本語を使うように心がけているが、やはり難しい。三月になって私たちは各々、就職活動が始まるが、面接やグループディスカッションで、どれだけ自分を出して発言できるかが鍵だと思っている。人事の方は学力や実績よりもどんな人なのかで選んでいると聞いたので、私は私自身を精一杯に出して、正しい日本語を話すように心がけ、面接一回一回に臨みたいと思う。日本人である限り一生、日本語とは関わるので、恥ずかしくない大人になれるよう、この三年間の思い出のある経験を活かしたい。